

解決信じ殺害現場残したい、でも 維持費に懸賞金、遺族が抱える負担

古畑航希 2023年2月19日 15時00分



父・金次郎さんが撮った写真を収めたアルバムを

眺める藤堂早苗さん。毎年正月には自宅前で家族写真を撮っていたという 2023年2月9日古畑航希撮影



[福岡市東区](#)の民家で2001年に発生した強盗殺人事件は、未解決のまま26日で22年を迎える。事件現場となった民家は老朽化が進み、維持費がかさむ。現場を残すべきか、手放すべきか。遺族は答えを出せずにいる。

東区の住宅街の一角にある2階建ての一軒家。周囲には「防犯パトロール実施中」ののぼ

りが立つ。今年 9 日、[千葉県](#)在住の藤堂早苗さん（67）は約 10 カ月ぶりに実家を訪れた。

01 年 2 月、この家で金丸金次郎さん（当時 80）と妻の愛子さん（同 73）が殺害された。2 人は早苗さんの両親だ。

「ここが、父が殺された場所です」。荷物置き場となっている 2 階の部屋。カメラが趣味だった金次郎さん撮影の写真が収まるアルバムが積み上がる。「私が結婚する時も、家の前で（父が）写真を撮って式場に行ったんです」

早苗さんは 13 年から「私的懸賞金」を設け、現在は 250 万円になっている。13 年以降、26 件の情報提供があったが、解決には至っていない。公的な「捜査特別報奨金制度」と異なり、年 1 回の更新時に全額を自分で準備しなければならないが、早苗さんが受け取る年金の約 2 年分にあたり、パートは欠かせない。

事件解決の糸口になるかもしれないと維持し続けている家も、負担は重い。12 年からは町内会や老人会の集会所として地域の人たちに低料金で貸し出し、定期的に庭や室内の掃除もしてもらっている。早苗さんは「地元で親戚がいないので助かっている」と話す。固定資産税の支払いや、老朽化する家屋や設備の修繕費も必要だ。今回も、エアコンが動かなくなっていた。

「壊したくない。でも、子どもの代にまで負担をかけるわけにいかない」

殺人事件の時効は 10 年に廃止され、捜査は現在も継続中だ。福岡県警はこれまで延べ約 6 万 9 千人の捜査員を投入し、今年 10 日には東署員らが情報提供を求めるビラを現場周辺の商業施設で配った。

元警視庁幹部の土田猛さん（76）もビラ配りに参加した。00 年に起きた東京都・世田谷一家殺人事件の捜査本部がある成城署で 05 年から約 1 年半、署長を務め、現在は殺人事件の遺族でつくる「宙（そら）の会」の特別参与を務める。

土田さんは、事件現場となった家を維持するか、手放すかで悩む多くの遺族を見てきた。「集会所のように公共性を持つのであれば、行政が支援して保存できないか。負のイメージがある殺人現場を地域の施設として利用すれば、被害者支援にもつながる」と指摘する。

「なぜ、両親が殺されなければならなかったのか」。20 年以上が経過しても、早苗さんの心は締め付けられたままだ。「犯人が捕まるまで、墓には入れません」（古畑航希）

福岡市老夫婦強盗殺人事件

2001 年 2 月 26 日、福岡市東区若宮 5 丁目の住宅で金丸金次郎さん（当時 80）と妻の愛子さん（同 73）が遺体で見つかった。金次郎さんのはどに切り傷があり、愛子さんは首と両足に電気コードが巻かれていた。死因は金次郎さんが窒息死、愛子さんは頸髄（けいずい）

損傷。

2人は17日夜に殺害された可能性が高いとみられ、捜査関係者によると、現場には4種類
の靴の跡や、凶器とみられる包丁4本が残されていた。風呂場の窓に火で燃やして格子
が外された形跡があった。